

## 17. 内省を経て成熟へ

# 医事万華鏡

新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく「緊急事

態宣言」が、4月7日に政府より発令され早1カ月が経ちました。東京都をはじめ、各都道府県も不要不急の外出自粛を呼び掛けています。まさに「一億総ひきこもり」を強いられているというわけです。

ただ、世にネガティブなものとして見なされる「ひきこもり」ですが、自立のための過程、大きく成長するための機会という解釈もまた存在します。

例えば、スイスの深層心理学者C・Gユングは、人生の前半は「自我実現」をし、人生の中盤からは「自己実現」をしていくと語っています。そしてこの自己実現こそ人生の究極の目標であるとも述べています。ただ、その自己実現の前提には、自我の確立が必要であり、不要なものをそぎ落とすことで、心の土台を形成する必要があるのです。そして余計なものを削ぎ落す過程には、深い内省の時間が費やされます。

また、ルネサンス期の偉大な彫刻家であるミケランジェロも、余分なものをそぎ落としていく過程で、彫像は完成

していくという言葉を残しています。彫像とはユングの言うところの「自己」と言い換えても良いでしょう。不要を否定することで、自己が実現（＝完成）していくということです。

一方わが国にもまた、天の岩屋戸に引き籠もった天照大御神のように、引きこもりを大きく成長する機会であると信じて待つ文化がありました。まさに蛹から蝶への変容（メタモルフォーシス）です。

とすると、新型コロナウイルス感染拡大防止のために外出自粛を強いられている今の状況というのは、日本が新たに成長するための「内省の機会」と見なすことができるのではないのでしょうか。この機に生まれたパラダイムシフトによって、ポスト・新型コロナの時代には、今あるコンセンサスが通用しない世界が到来するかもしれません。

さて、戦後長期にわたって受動的且つ弥縫的な外交に終始してきたわが国は、国家（＝自我）としての在り方が確立されないままであり、国体（＝自己）を具現化する土壌にすら立っていないと言えそうです。その意味で、わが国が高度経済成長を経て「成熟国家」を実現したなどといっても、その成熟たるや経済的な枠組み、表層的なものに過ぎなかったという事です。しかし漸く、今までの在り方に別れを告げるチャンスが到来しました。今こそ日本は国体の有り様を、また各人はそれぞれの立場で目指すべき未来の方向性を思い描き、具体的な創造へと転化させてゆくと期待されています。

（JMS主幹・野村元久）

